



ヨーロッパ文明の終焉によせて詠いあげる巨匠ヴィスコンティ畢生のレクイエム

昭和53年度芸術祭大賞受賞

# 家族の肖像

CONVERSATION PIECE

バート・ランカスター  
ヘルムート・バーガー  
シルヴァーナ・マンガーノ  
クラウディア・マルサーニ  
ステファノ・パトリッツィ  
特別出演  
ドミニク・サンダ  
クラウディア・カルディナーレ



監督ルキノ・ヴィスコンティ

脚本スーゾ・チェッキ・ダミーコ  
エンリコ・メデオーリ  
ルキノ・ヴィスコンティ

撮影バスカリーノ・デ・サンティス

音楽フランコ・マンニーノ

製作ジョヴァンニ・ベルトルッチ

伊仏合作ルスコニフィルム ゴーモン・インターナショナル  
テクニカラー・トッドAO作品 (ワイドアスペクト) センチサイズ  
東宝東和・フランス映画社 共同配給



昭和53年度芸術祭大賞  
1978年度キネマ旬報ベストテン  
外国映画第1位  
第21回ブルーリボン最優秀  
外国映画賞  
「スクリーン」外国映画第1位  
日本映画ペンクラブ外国映画第1位

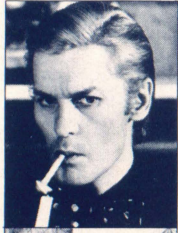
# 家族の肖像

監督ルキノ・ヴィスコンティ  
カラー作品(伊・仏合作)

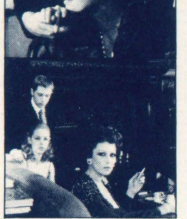
東宝東和・フランス映画社 共同配給



CONVERSATION PIECE



●解説「家族の肖像」は巨匠ルキノ・ヴィスコンティの自伝的色彩がもつとも濃いとされる晩年の代表作である。アメリカで科学者だった主人公の教授が、近代文明の未来を危惧してローマの生家にひきこもり、静かな晩年を迎えようとするが、不思議な家族の一群の侵入によって死に至るといふ設定……。そこにヨーロッパ文明の滅亡の寓意と頹廢の地獄図を発見したヨーロッパの批評家たちは、この映画を巨匠の遺言、ヘヴィスコンティ映画の集大成として絶賛した。(ル・モンド)のジャン・ド・パロンセリは、教授はヴィスコンティその人の自画像とみているほどだ。デカダンスの魅力を描きつづけていた発散するヘルムート・バーガー(「地獄に墜ちた勇者ども」)、魔性の貴婦人役を堂々と演じきるシルヴァーナ・マンガノ(「ベニスに死す」)、15才の新人クラウディア・マルサーニの凄刺たるデビューぶり、編集助手出身のステファノ・パトリッツィの生気みなぎる演技を、教授を演じるバート・ランカスター(「山猫」)が、孤独な心をつつせつと表現していぶし銀のように味わい深い名演で支えきる。加えて特別出演のクラウディア・カルディナーレとドミニク・サンダの豪華な演技陣。スタッフも永年のヴィスコンティ作品の常連ぞろいで、キャスト、スタッフとも、ヴィスコンティ一家の総結集の顔ぶれである。ヴィスコンティは、1976年3月17日心臓病で全世界から惜しまれつつ世を去った。



わが映画 わがレクイエム  
ルキノ・ヴィスコンティ

私の作品にひんばんにあらわれるのは、家族の物語であり、私の自己破壊と解体です。物語を語りながら、私は、レクイエムをうたうがように映画をつくっています。私の作品には、もろもろの矛盾から一挙に破局に至る瞬間が必ずあります。その時、主人公たちは、自分自身の意志的選択によるうと、周囲の状況によろうと、結局、自分自身と対決することになる。愛による関係や家族的な関係から救いの手が彼らにさしのべられようとしのべられまいと、また、権力や金力でそうした救いの手があろうとなかろうと、結局の状況は変わりません。彼らは孤独です。その時直面する状況をなにとつ変えよう望みもなく、いや、そういう望みをもつ希望すらもちえぬ程、徹底して孤独な局面に立たされる。

私のことをデカダン(頹廢主義者)という人がいます。デカダンスについては、私は、トーマス・マン同様、積極的な賛同者です。全身デカダンスに染まっているといつてよい。トーマス・マンはドイツ文化のなかで、私はイタリア文化のなかでデカダンです。私の一貫した関心は病的社会の検診なのですから。

【スタッフ】  
監督……………ルキノ・ヴィスコンティ  
脚本……………ルキノ・ヴィスコンティ、スーゾ・チェッキ・ダミコ、エンリコ・メディオーリ  
撮影……………パスカリーノ・デ・サンティス  
音楽……………フランコ・マルチーノ  
美術……………マリオ・ガルブリア  
編集……………ルッジェーロ・マストロヤンニ  
製作……………ジョヴァンニ・ベルトルッチ

【キャスト】  
教授……………バート・ランカスター  
ピアンカ・ブルモンティ……………シルヴァーナ・マンガノ  
コンラッド・ヒューベル……………ヘルムート・バーガー  
リエッタ・ブルモンティ……………クラウディア・マルサーニ  
ステファノ……………ステファノ・パトリッツィ  
エルミニア……………エルヴィラ・コルテーゼ  
教授の妻……………クラウディア・カルディナーレ  
教授の母……………ドミニク・サンダ

Rusconi Film (伊) / Gaumont International (仏) 合作1974年作品  
〈サントラ盤〉セブンス・サイズ



●ストーリー「家族の肖像」と呼ばれる一連の絵画の収集を唯一のたのしみにして、ローマの中心地にある豪邸にとじこもっている教授。その静かな生活に、ある冬の日、不思議な家族の一群があらはしく侵入する。ピアンカ・ブルモンティ夫人とその娘リエッタ、婚約者ステファノ、ピアンカの情夫らしい美青年コンラッドの4人である。邸の二階の住人となった若者たちの存在は、教授には迷惑でしかないが、教授は、下品に振舞うコンラッドに意外に純粋な心を発見して、永い間、他者とのふれあいをかたくなに拒んできた自分の生き方に気づく。が、4人の「家族」たちは、わがままで、無道徳で、頹廢のかぎりをつくし続けて、教授とのトラブルはたえない。和解のために教授が4人を招いた晩餐の席―それは一幅の「家族の肖像」のようだった。決定的な破局の夜がおとすれる……。

〔テクニカラー、トッドAO、上映時間2時間1分〕